

論文

Lockwood と世間

—もう一つの語り手—

服 部 茂

要 旨

Wuthering Heights (Emily Brontë, 1847) は、Nelly と Lockwood の二人の語り手で物語が進行する。Nelly から聞いた物語を Lockwood が日記風に記録をして読者に伝える。Lockwood は、Grange¹ の借家人である。部外者としての立場を取る Lockwood は、それ故、作中において Heathcliff 物語に客観性と信憑性を与える役割をしていることは周知の通りである。では、なぜ、Lockwood は、そのようなことができるのか。それは、彼には世間というものをもっているからである。この「世間」の挿入で小説全体に一層のリアリティと了解が得られるのである。そういった意味において「世間」がもう一つの語り手といえよう。ところが、Lockwood の世間は、Heights² では通用しなく、一方、その彼の世間が Cathy³ と Hareton を結びつけることになる。結果としてその世間が、作中では登場人物と同等に機能するのである。

本論では、Lockwood を一般人としての観点からその人物像を考察し、Lockwood と世間がこの作品を側面から支える一つになっていることを論じる。

キーワード：Lockwood, 世間, リアリティ, 大衆, 常識, 良識, 分別, 正常と異常

I

Lockwoodに関して、これまでの研究は構造上、プロット上の効果と物語にリアリティとバランスを与えるということに集約される。Liddellは、“He (=Lockwood) is one of those who help to connect the worlds of *Wuthering Heights* and *Thrushcross Grange*.”⁴、と述べ作中のLockwoodの役割を、Woodringは“The author manipulates and tolerates Lockwood much more for structure and plot than for theme.”⁵と述べ作品上でのLockwoodの役割を技巧的な面から効果を解説する。

To read about Lockwood is to become acquainted with a type of young man from London or the South, who might well have read *Wuthering Heights* in 1847. . . . To use a typical young man about town as first narrator adds to the realism of the novel. Readers could more readily identify themselves with him than with the other characters, or at least recognise him to be like the ordinary young men they were in the habit of meeting in real life. Thus readers could accept more easily through his account the extraordinary story that Nelly reveals to them.⁶

Mayneは、若い読者とありふれた人物のLockwoodが同一視でき、この作品の受け入れ易いリアリズム性を指摘する。Millerは、二重の語りなど技巧を駆使することは、“strategically”であり“to frustrate the expectations of a reader such as Lockwood”⁷と述べLockwoodが読者を代表する効果を指摘する。以上のように、Lockwoodの存在は、この小説において重要な登場人物の一人であると要約される。次に、Lockwoodを作中の登場人物として考察する上で彼の人物像を概観してみる。

北部地方にやって来たLockwoodは、プライドが高く、教養を身につけた紳士である。読書ができ、論理的に思考する力を持ち、物事にも関心を寄せ、自分でできる範囲で自助精神を併せ持ち、社会生活もつつがなく送る。Nellyも言葉使い、風貌、品格からEdgarを引き合いに出しLockwoodを紳士と認める。一方、早計で、慇懃無礼で、独善的なところもあり、本音と建前もうまく使い分ける。いずれにしても、長所、短所総じて、Lockwoodは、正当なイングランド人として描かれている。

Lockwoodは、この地域を“A perfect misanthropist’s Heaven” (I) と叫ぶ。作品中の冒頭のこの言葉からLockwoodは“misanthropist”と見なされがちである。この叫びの言葉は、二通りの解釈ができる。一つは、もし本物の人間嫌いがやって来たらそれは文字通りの天国であろうというLockwoodの客観的な仮定を交えた風景描写。もう一つは、

Lockwood 自身が人間嫌いなための正直な感想。この場合、明らかに前者の解釈である。Lockwood は、早々に “a struggle with low spirits, and solitude” (IV) <下線部筆者> に敗れ、“Oh, this dearth of the human physiognomy” (X) と声を上げる。Woodring も、彼は人間嫌いではなく、“So gregarious is he that he soon craves conversation with his unpromising housekeeper, Mrs Dean.”⁸ と Lockwood は社交的と指摘する。彼の口調、話し振りから、Lockwood の性格を “unsociable” とは到底言えないと述べる。筆者も同じ意見である。むしろ積極的に人と関わる社交家といえる。⁹ 人間嫌いであれば、Heights を訪問したり、Nelly の話に興味をもったりしないだろう。もっとも、Lockwood は、話を聞くことが特に好きであるようだ。Heights への二回目の訪問を決意させたのも Heathcliff の話に関心を引いたためであり、また Heathcliff が Lockwood を Grange へ見舞いにきた際にも、Heathcliff の話に満足したのである。Miller は、“Lockwood, the timid and civilized outsider, . . . is the reader’s delegate in the novel. He is that familiar feature of realistic fiction, the naive and unreliable narrator.”¹⁰ と評する。素朴で信頼できないところが Miller のポイントである。完全な人間は、たとえ小説の世界であっても人は警戒するものである。完全な人間では、リアリティに欠けるのである。だからこそ、Lockwood は、読者の代理といえるのである。Lockwood は、一般の紳士である。¹¹ その彼の首尾一貫しないところがこの小説をリアリズムたらしめているのである。

以上、Lockwood は、ありふれた紳士であるので、平凡な日常生活を送り、人々と交際する。そうした、社会生活を通じて暗黙に存在する了解ごとを持ち合わせている。それは、一般に通じる法律、道徳、慣習、伝統を含めたものごとの見方の正当的な良識、分別の総和であり、コモンセンス (common sense) である。本論では、それを Lockwood の「世間」と定義して、次章では、Lockwood と Heights との関わりを世間という観点から考察する。

II

Lockwood は、確かに Heights を訪問して動揺していたに違いない。いや、むしろ動転に近い。Lockwood が日記風に述べる “1801—I have just returned from a visit to my landlord.” (I) と記したその時点で青ざめていた。Lockwood は、都会からやって来た独身の紳士である。その紳士、Lockwood は、正当な世間を持ち込もうとして失敗したのだ。Lockwood は、“Mr Lockwood, your new tenant, sir. I do myself the honour of calling as soon as possible, after my arrival, to express the hope that I have not inconvenienced you by my perseverance in soliciting the occupation of Thrushcross Grange: I heard, yesterday, you had had some thoughts—.” (I) と述べ、Lockwood は

身につけている常識という世間を背負って訪れたのである。つまり、家主である Heathcliff に律儀に挨拶をし、借り手である Lockwood が友好的に歓待され、良好な関係が築かれる。都会的に洗練されたスマートな人間関係をイメージしていたのである。しかし、Lockwood は、いきなり Heathcliff にその様子を拒絶されてしまう。Heathcliff は、“The ‘walk in’ was uttered with closed teeth, and expressed the sentiment, ‘Go to the Deuce.’” (I) と述べ Lockwood に対して不快感を露にする。

一方、Lockwood は、“I felt interested in a man who seemed more exaggeratedly reserved than myself.” (I) と述べ、Heathcliff の内向的な態度と無愛想さに興味を抱くのである。それ故、Lockwood は、早速、世間の常識を駆使して Heathcliff の人物像を詮索するのである。Heathcliff の所有する屋敷、その建物に応じた人物であるかどうか。Lockwood は “some people might suspect him of a degree of underbred pride—.” (I) と世間を持ち出し、客観的に一般論を述べるが、Lockwood の評価は、“Mr Heathcliff forms a singular contrast to his abode and style of living.” (I) としながらも “He is a dark skinned gypsy, in aspect, in dress, and manners a gentleman, that is, as much a gentleman as many a country squire.” (I) と紳士と判断する（後に Heathcliff の乱暴な物言いから紳士であることを取り消す）。しかし、Heathcliff を “northern farmer” と下した Lockwood の人物評は、Lockwood の性格が “naive” で “unreliable” の裏づけでもある。Lockwood は、自分の気分に合わせて勝手に人物像をつくり上げるのである。彼は、“No, I’m running on too fast—I bestow my own attributes over liberally on him (=Heathcliff).” (I) と述べ、最終的には、“Mr Heathcliff may have entirely dissimilar reasons for keeping his hand out of the way.” (I) と常識のフィルターを通じて落ち着くのである。Heathcliff は、世に言う上品で気品のある人物ではない。この時点で、Heathcliff は、両家を手に入れ、Cathy を一文なしに落とし入れ、Hareton を野放しにし、感情にまかせて暴力もふるうのである。Heathcliff は、Lockwood のいう世間はないのである。Heathcliff にとってみれば、“A stranger is a stranger, be he rich or poor.” (II) なのである。だから、身分上の上下は存在しない。Lockwood は、Linton 側に属する人物である。よって、Heathcliff の犬からもその洗礼を受けるのである。犬に襲われる Lockwood を Heathcliff は、助けようとししない。これは、Heathcliff が世間と対峙する態度である。如何せん、Lockwood は、Heights のその独特感が理解できないのである。それ故、人、動物のみならず Heights の空気と闘わなければならない。

Lockwood は、“Let me hope my constitution is almost peculiar.” (I) と自分の性質を述べるのであるが、実のところその性質は、Lockwood ではなく Heathcliff と Heights の住人の方である。Miller の言葉を借りれば、Lockwood は、やはり “naive” なのである。一

Lockwood と世間

度目の訪問で予期せぬ待遇で洗礼を受けた Lockwood は、Heights に受け入れられたはずであった。しかしながら、懲りない Lockwood は、再び世間を背負い二度目の Heights を訪問する。Lockwood の性格が災いして、既に家主 Heathcliff と面会を果たした Lockwood は、必要も義務もないにもかかわらず Heights に出向くのである。

Lockwood は、Heights の異様な雰囲気気づかない。今度は、Heights の住人に対して世間を持ち込もうとして痛い目に遭うのである。Lockwood は、Heathcliff, Hareton, Cathy の中に放り込まれ一人浮いた存在になる。ここでも、Lockwood は、世間を盾にして常識で対応しようとする。むしろ、自分の居場所を求めて世間を探し始める。手始めに紳士の階級が持ち出す序列、ここでは家族の関係を探りだそうとする。Lockwood は、Heights にいる面々がどのような関係なのかを外見から、しぐさから、お互いの対応から推測する。彼が世間を持ち出すほど混乱し当惑する。挙句の果て、猫と兎の間違いまで犯す。Cathy を Heathcliff や Hareton の妻とみたりしてますます迷走する。家庭は、明るく、楽しい食卓であるべきで、そして、美しい妻がいるものだという当時のイングランド人の疑いのない風潮で、心をくじかれては立て直そうとする。

I thought, if I had caused the cloud, it was my duty to make an effort to dispel it. They could not every day sit so grim and taciturn, and it was impossible, however ill-tempered they might be, that the universal scowl they wore was their everyday countenance. (II)

Lockwood が考える常識が少し揺らぐが、その常識に疑いを向けることはない。

‘it is strange how custom can mould our tastes and ideas; many could not imagine the existence of happiness in a life of such complete exile from the world as you spend, Mr Heathcliff; yet, I’ll venture to say, that, surrounded by your family, and with your amiable lady as the presiding genius over your home and heart—.’ (II)

Lockwood は、正論である一般論を述べ、論を張って家族、そして食卓の雰囲気が “grim” で “taciturn” であるのは一時的なものであると考え、その場を何とか取り繕う会話を弾ませようとするものの、Heathcliff に遮られてしまう。

Though Lockwood’s thinking is stereotypical, he (=Lockwood) is right to expect some familial relationship among his tea-table companions, and right too to be daunted by

the hellish lack of relationship among them. For though Hareton, Heathcliff, and Catherine II are all in some sense related, the primordial schisms that have overwhelmed the Heights with hatred and violence have divided them from the human orderliness represented by the ties of kinship.¹²

Gilbert と Gubar は、正論からくる一般論を述べる Lockwood に同情する。Hareton と Cathy 以外は、血縁関係にはなく Heathcliff は、完全な他人である。この時点で Lockwood は、“I resolved to be cautious how I ventured under those rafters a third time.” (II) と述べ、ようやく Lockwood は、Heights の雰囲気違和感を覚えるのである。Heights には世間は存在しないのである。Lockwood の Heights への訪問が、それを証明したのである。

ところで、Lockwood は、どうしてわざわざ北部地方にやって来たのだろうか。Lockwood は開口一番 “I do not believe that I could have fixed on a situation so completely removed from the stir of society.” (I) とこの土地の孤独で寂寥たる眺めを強調する。そして “A perfect misanthropist’s Heaven” (I) と吐露する。先に筆者は、Lockwood のこの言葉を「客観的な仮定を交えた風景描写」と論じた。実は、この客観的な感想は、同時に主観的な感想でもある。つまり、Lockwood は、そのときの心情を語ったのである。Lockwood の気持ちとこの寂寥たる風景が一致していたのである。この地域の感想は、Lockwood の直接的な気持ちなのである。結論を言えば、Lockwood は失恋をしたのではないだろうか。彼が告白する、魅力的な女性との関係がうまく行かずそれを忘れるための一時的な放浪だと考えたい。Lockwood の恋愛の取引の話も解釈のしようでは、彼女が勘違いをしてその場から去ったのではなく、むしろ Lockwood の方がその場から逃げざるを得なくなったのではないかと疑うこともできる。いずれにしても Lockwood は、恋愛が実らなかった。だから、Lockwood は、自ら自虐的に “misanthropist” と言ったのである。失恋によって傷心した Lockwood は一時的にあるにせよ人間嫌いになってしまったのである。冷たい北風に当たりに自分を癒すべく北部地方の田舎に足を向けさせたのである。Lockwood は、なぜ北部にやって来たのかという Heathcliff の質問に “An idle whim” (XXXI) と言葉を濁して答えている。それもそのはずである。Nelly から詳細な Heathcliff 物語の熱烈で、劇的な恋愛話を聞かされた Lockwood にしてみれば、決して本当のことを言えるところではないからである。その話が恋愛話の壮絶な人物物語だったとは、皮肉なことである。

From Lockwood’s history, it is clear that his character differs sharply from that of Heathcliff. Lockwood who confesses to a susceptible heart, is never able to follow its

promptings. Heathcliff, on the other hand, is committed to a love that surmounts death.¹³

と Mayne は述べる。恋愛のレベルもスケールも全く異なるのである。初めて対面した Heathcliff を自分と似たもの同士と思い込もうとしたが、似ていたところはお互い警戒心の強さだけであった。

III

Lockwood は、Heights で世間を見出せず自分を見失っていた。吹雪のため Heights に足止めを余儀なくされた Lockwood は、Grange に帰る手立てに手をこまねいていた。そのとき、Heathcliff, Cathy, Hareton の三人がそのことで話し合う場面がある (II)。このとき、Cathy と Hareton は、Lockwood 側につくのである。Hareton は、“I'll go with him (=Lockwood) as far as the park.” (II) と Grange までの同行を申し出る。Cathy も “A man's life is of more consequence than one evening's neglect of the horses; somebody must go, . . . I hope Mr Heathcliff will never get another tenant, till the Grange is a ruin!” (II) と案内の必要性を具体的に述べる。この Cathy と Hareton の言葉の中には、Lockwood が纏っている世間に通じるものがある。Cathy は、人の命の尊さを訴える。良識的な真つ当な判断である。さらに、彼女は Heathcliff に対して世間との利害関係を指摘し、世間の影響を強調する。Cathy は、世間を持ち出したのである。その Cathy は、そのとき Heights で遇されるべき待遇を受けていなかった。憎悪と反抗と軟禁によるストレスで心がすさんでいたのである。彼女の方こそ “misanthropist” の状態であったのである。だから、本来、世間を備えている Cathy の良い性質が隠されてしまっていたのである。Cathy (Hareton の世間は、後年形成される) には、世間があった。Lockwood 自身にも気持ちに余裕がなかったため二人に対して世間という共通点を見出せずにいたのである。その後、その世間は予期せぬ結末を導くのである。それは、以下の経緯である。

二ヵ月半のときを経て、Lockwood は、London に出向くという理由でしばらくの間 Grange を留守にする旨を Heathcliff に通達するため Heights を訪れる。このときの訪問では Lockwood は、時の経過がそうさせたのか前回よりも随分と冷静であった。出迎えたのは、Heathcliff ではなく Hareton であった。相変わらず Cathy は、Lockwood には関心を示さない。一方、Lockwood は、Hareton の潜在能力を見抜く。そして共感、同情心を抱く。Cathy は、Heights には読む本もないということから、Hareton が彼女のお気に入りの本を持っていったと責め、その本の素晴らしさを台無しにしたと彼のことを罵る。

Lockwood はそんな軽蔑され侮辱された Hareton の葛藤、辛さを心情的に理解するのである。Lockwood の世間と教養がそう理解させたのである。自分を的確に表現できない Hareton に代わって Lockwood は、彼の心境を代弁するのである。

‘Mr Hareton is desirous of increasing his amount of knowledge,’ I said, coming to his rescue. ‘He is not *envious* but *emulous* of your (=Cathy’s) attainments—He’ll be a clever scholar in a few years!’ (XXXI)

Lockwood は Hareton を弁護する。Lockwood は、本から得られる喜びと本が性格を高めるといふ世間を持ち出す。

‘But, Mrs Heathcliff, we have each had a commencement, and each stumbled and tottered on the threshold, and had our teachers scorned, instead of aiding us, we should stumble and totter yet.’ (XXXI)

Lockwood は、人間の成長過程を説得力をもって雄弁に語り、Hareton の人間として成長したいという努力を擁護する。これには、Cathy も “I don’t wish to limit his (=Hareton’s) acquirements . . .” (XXXI) と言葉に詰まり反論ができない。それは、Lockwood が、世間を持ち出し普遍性を強調しただけでなく、Cathy も同じ世間をもつ故、Lockwood の言葉を十分に認識していたからである。彼らのこの一件は、Cathy に対してその後の Hareton との関係に影響を及ぼしたに違いない。

九ヶ月後、再度 Heights に立ち寄った Lockwood は、世間と文化的な関係を結んだ二人を見て Cathy との関係を結ぶ機会を逃してしまったことを心の底から悔やむ。Lockwood は、Cathy のその外見の絶妙な美しさに恋心を抱いた。完全な片思いである。Nelly は “You see, Mr Lockwood, it was easy enough to win Mrs Heathcliff’s heart.” (XXXII) と Lockwood に語る。Cathy の心をつかみとることは、Lockwood の世間と教養で十分だったようである。結局、Lockwood は、新しい恋を实らせるどころか、自分の世間と教養を Cathy と Hareton のために使ってしまった。もはや、忙しい世間に属している Lockwood の入る余地はない。たとえあったとしても彼らの中に割って入ることは不可能である。皮肉にも Cathy と Hareton の二人には、本という世間を切っ掛けに Lockwood の世間が通用したのである。次章では、*Wuthering Heights* における世間について考察する。

IV

両家において召使として仕えた Nelly は、その経験から知り得た Heathcliff 物語を Lockwood に語るという形で読者は、その全貌を知るに至る。Nelly が信頼される人物かどうかは議論の分かれるところであるが、¹⁴ Gilbert と Gubar は “She is accommodatingly manipulative, a stereotypically benevolent man’s woman.”¹⁵ と評する。この見方をすれば Nelly の言葉は必ずしも信頼できるとは言い難い。しかし、Nelly が語る Heathcliff 物語は、すべて彼女自身の独断的な判断だけではない。その背後には、Gimmerton という世間が存在するのである。時折、“I believe” と付け足して彼女の主観的な推測を述べることもある。しかし、Nelly の語りの中に、世間という客観性を巧妙に盛り込こむことによって彼女の語りの妥当性を高めることに成功している。つまり、Nelly の視点には、何がしかの根拠が含まれているのである。たとえば、Nelly は、Heathcliff のことを第 4 章において “He’s very near.” (IV) と述べている。これは、彼女の正直な主観的な感想であるのだが、その見解は、村人たちが “The villagers affirmed Mr Heathcliff was *near*.” (XVIII) というように彼らの見解でも一致している。Heights での Hareton の扱われ方では、“The unfortunate lad is the only one, in all this parish, that does not guess how he has been cheated!” (IV) と語ることで Hareton の閉鎖された環境を想像させるし、第 9 章の Catherine の婚約の相談の場面では、“But there are several other handsome, rich young men in the world.” (IX) <下線部筆者> と述べ、いわゆる「世間」を強調することで他の選択肢を促す。また、Nelly は、“I don’t pretend to be intimately acquainted with the mode of living customary in those days, at Wuthering Heights.” (XVIII) と彼女の持っている情報量を断った上で、続けて “I only speak from hearsay, for I saw little.” (XVIII) <下線部筆者> とうまく世間の見解を利用してその信憑性を高めているのである。Nelly は、買い物に Gimmerton へ出かける。そこでは、村の人たちと会話をするだろう。Nelly のような話好きであれば、召使いとして雇われている日常のことをおもしろおかしく話しているに違いない。その話が人から人へと伝わり Heights の内部の状況が伝えられたり、噂が形成されたりすると考えることができる。

Nelly, Lockwood, Gimmerton の村人の他に、医師の Mr Kenneth, 弁護士の Mr Green, 牧師補の Mr Shielders, Heights の後年の女中 Zillah, Linton 家の住人及び両家と関わる人たちが世間としての役目を果たす。彼ら登場人物は、Heathcliff 物語に世間を配置する役割をもっている。Nelly の語りに信憑性を醸し出しているのは、彼らの存在が至る所にちりばめられているからである。Nelly の語りには、この世間の判断が加味されることによって、Nelly の独走を許さない物語としてまとまるのである。さらに、世間との

関与を見てみる。

Heights は、あたかも世間から遮断するかのごとくその門はしっかりと閉ざされてある。一つの情報すら通さない別世界の雰囲気醸し出す。しかしながら、Heights の人間関係に関する情報は、医師の Mr Kenneth や牧師補の Mr Shielders によって外に出ているのである。その世間とは、“the parish”, “the neighborhood”, “Gimmerton” である。例証を挙げよう。Hindley が妻 Frances を Heights に連れて帰ったとき “a thing that amazed us, and set the neighbours gossiping right and left—he brought a wife with him.” (VI) <下線部筆者> と世間を巻き込む騒ぎになっている。それは、Earnshaw 家の跡取り息子ということもあって世間では注目されていたのである。亡くなった Heathcliff を埋葬する際にも “We buried him, to the scandal of the whole neighbourhood, as he (=Heathcliff) had wished.” (XXXIV) <下線部筆者> と述べその埋葬方法が世間によって反発されている。世間の声を引き合いに出すことによってその行為の反響や異状さを伝える。その判断には、世間の判断がすなわち世論として読者の判断と一致するのである。Mr Kenneth は、Catherine の病気のことについて “We’ve odd reports up here.” (XII) と述べ、元気で知られる Catherine がなぜ病気になるのか疑問を呈する。これも、世間の一致した感想である。彼は Nell が言う “He (=Kenneth) was a plain rough man.” (XII) という性格柄、話を誇張することはあっても隠すことはない正直な人物だといえる。特に、彼は、Heights と古くからの付き合いがあり、しかも Hindley と同い年ということもあってその情報は多く所有しているはずである。それ故、その言説には信頼度が高いのである。Mr Kenneth の説明も “I have it on good authority that . . .” (XII) や “My informant said . . .” (XII) と述べることで Kenneth 自身も間接的に情報を得ることから、その背後には複数の人たちの世間が存在する。ただ、話しの出所がはっきりしない分噂の域を超えないのである。しかし、その噂もある種の見解と取れば、又聞きも話の信憑性を上げる効果はあるのである。その “authority” や “informant” が誰であるかを知っているのは Emily だけである。特定の人物を出さず出所をぼかすことで隠された世間をつくる。Nelly や彼らの言説の中には、この世間が存在しているのである。しかし、実際には、ほとんどその言説は、確定された事実ではない。あくまでも、伝わる話であり “report”, “rumor”, “hearsay”, “talk” といった風評である。その風評を取り入れることによって世間一般にある「よくある話」的のもっていくのである。それが、この小説全体の物語性を普遍的なものにしているのである。特筆することは、Isabella の駆け落ちの情報は、Grange から出たのではなく世間を通じて Nelly の耳に入ったのであった。鍛冶屋の娘 (the blacksmith’s lass) から、ミルクを取りにくる少年 (a lad that fetches milk) へ情報が伝わった。つまり、情報源とその情報の流れは、村→少年→女中→Nelly →Edgar である。その鍛冶屋の娘は、“She told it all over

Gimmerton this morning.” (XII) ということで村の世論を形成すべき村全体への伝達の役割を果たしている。

Heathcliff もその世間を抜け目なく利用するのである。Earnshaw 家と Linton 家の両家にわたる Heathcliff の行為には彼による世間に対しての情報操作も加えられている。この情報操作により自然に計画が達成されるよう仕向ける。Heathcliff は、Heights を一週間ぐらい留守にしたとき (XXII) があるが、この期間に、おそらく Gimmerton へ出向いて情報操作をしていたのであろう。作中にも第 23 章から 27 章の途中まで自ら姿を消し登場していない。これらの章は、Linton と Cathy の結婚まで導く大詰めとなるところである。Heathcliff は、Nelly と Cathy を Heights に監禁し Linton と Cathy の結婚を果たし、同時に危篤状態の父 Edgar には、娘との対面を危うくする場面である。Heathcliff は、世間を持っていないが世間を知っている人物である。それどころか、Heathcliff は、青年のころ Heights を去り 3 年間世間を生きてきて世間を熟知しているのである。その世間を利用するのである。Heathcliff は、その世間の力を使って自分の計画の正当性を取り付けるのである。実際には Nelly と Cathy は、Heathcliff に監禁されたのであるが、Gimmerton では沼地に落ちたことになっている。Zillah が次のように言う。

‘Eh, dear! Mrs Dean,’ she (=Zillah) exclaimed. ‘Well! there is a talk about you (=Dean) at Gimmerton.’ . . . ‘It’s not his (=Heathcliff’s) tale—they tell that in the village—about your being lost in the marsh.’ (XXVIII)

Heathcliff は事実を曲げ情報を操作してその上、彼が Nelly たちを助けて Heights で保護しているとでっ雫上げる。最後には、弁護士である Mr Green も “He (=Mr Green) had sold himself to Mr Heathcliff.” (XXVIII) とうまく丸め込まれ Heathcliff に有利になるよう働きかけるのである。これは、Heathcliff が世間の性質を知る上でできたことである。世間の噂の短命さと、人間の欲を Heathcliff は突いたのである。次章では、本論の結論をまとめる。

V

Wuthering Heights の背景となる世間は、Lockwood を筆頭に Mr Kenneth, Mr Green Mr Shielders の他 Gimmerton の住民たち。彼らは、世間の役割を果たすが、必ずしも公正な、完全な人物ではない。Mr Kenneth は、ほとんど患者を完治することなく Catherine はもちろん Lockwood の風邪さえ治療できていない。Mr Green も大切な場面では、言いくめられる始末である。彼らは、不要なときこそその存在感を発揮するのである。それ

故、世間として機能するのである。Zillahは、損得勘定で考える利益優先の召使であり、彼女も典型的な世間の一人として数えられる。Nellyも読書ができる召使であることから書物的世間を備えている。彼女らは、大らかで正直に生きていて、ときには利己的で意地悪な面もあるどこにでもいる世間の人物である。ユーモアをもつ人物として描かれている。Gimmertonの人たちはゴシップが好きである。世間にはそれが溢れている。

Lockwoodの世間が通用しなかったことで、HeightsとGrangeの内情やHeathcliff物語が明らかになった。それが、この小説を成立させている要因の一つである。もちろん、Lockwoodの世間が通用して、彼が人物に興味を持たなかったら、この物語は別の趣旨になったのである。Lockwoodは、この小説全体の中で読者の代理になり得た。それは、つまり、世間をもつLockwoodは読者との共通点、共感、倫理、欲望が呼応したのである。二重の語り手に世間を入れることによって三重の語り手になったのである。Emilyがこの小説を執筆した際、用いた技巧は高く評価されている。*Wuthering Heights*は、この技巧と内容とで読ませる作品である。Emilyは、この残酷で、熱烈で、しかも知的なこの作品の中にもう一つの登場人物である世間を密かに忍ばせたのである。

*Wuthering Heights*において、登場人物には言葉を発しない世間が存在する。読者はHeightsとGrangeの行ったり来たり狭い往復ではなく、地域的な広大な空間を想像させ、その向こう側には社会があるのだと読者に立体感を感じさせるのである。*Wuthering Heights*には、HeightsとGrangeだけで存在しているのでは決してない。それは、Gimmertonを中心とする人々も含まれるのである。そこには、社会を営む人々の生活があり、世間もまた存在しているのである。この世間は、当時の人々の考えを表しているものであり一つの常識であるといえる。なぜならば、外枠である世間が正常でなければ、Heathcliffを中心とするその内枠の異状な雰囲気や独特感がそれだけ薄れてしまうからである。したがって、世間が、この作品の大枠の存在としてのはたらきをしているのである。よって、世間がもう一つの語り手であるといえる。

註

作品からの引用は、すべてPenguin Books版による。テキストにおけるその該当する章に関しては、引用に続き括弧内のローマ数字でそれを示した。

Emily Brontë *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Harmondsworth: Penguin Books, 1985)

1. Thrushcross Grange屋敷をGrangeと表記した。
2. *Wuthering Heights*屋敷をHeightsと表記した。

Lockwood と世間

3. 二代目 Catherine を Cathy と表記した。
4. Robert Liddell, *Twin Spirits: The Novels of Emily and Anne Brontë* (London: Peter Owen, 1990), pp.17–18.
5. Carl R. Woodring, “The Narrators of *Wuthering Heights*”, Eleanor McNees, ed., *The Brontë Sisters Critical Assessments*, Vol. II (East Sussex: Helm Information, 1996), p.237.
6. Isobel Mayne, “Emily Brontë’s Mr Lockwood”, Eleanor McNees, ed., *The Brontë Sisters Critical Assessments*, Vol. II (East Sussex: Helm Information, 1996), pp.331–332.
7. J. Hillis Miller, “*Wuthering Heights*: Repetition and the ‘Uncanny’”, Eleanor McNees, ed., *The Brontë Sisters Critical Assessments*, Vol. II (East Sussex: Helm Information, 1996), p.361.
8. Carl R. Woodring, *op. cit.*, p.237.
9. 中岡洋編著, 『嵐が丘を読む』, (東京: 開文社, 2003), 第7章 「『嵐が丘』の語り手」において人間嫌いかどうかの Lockwood 論が展開されている。pp.176–181.
10. J. Hillis Miller, *op. cit.*, p.359.
11. 別の研究では, 深層心理の観点から Lockwood の残虐性や性欲について指摘されている。本論では, Lockwood を世間上のありふれた人物として論ずるためそれらの議論は改めて考察したい。
12. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, “Looking Oppositely: Emily Brontë’s Bible of Hell”, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven and London, Yale University Press, 1979), pp.261–262.
13. Isobel Mayne, *op. cit.*, p.331.
また Mayne は, この違いがある程度, 作品に調和と釣り合いをあたえ残酷で誇張されたゴシックのメロドラマとして読者に提示するのを避ける方法の一つだと作品上の観点から解説する。
14. cf. 拙論 「Nelly Dean について—彼女の感情と行為—」 『言語と文化』 第21号, (愛知大学語学教育研究室, 2009), pp.1–13 を参照されたし。
15. S. Gilbert and S. Gubar, *op. cit.*, p.292.